

認知症の人が地域の人々とともに生きる地域を どうつくるか

提 言

本人が外で活動する地域づくりをするために

1. 認知症に対する心のバリアをなくす。
2. 認知症本人の心のバリアをなくす。
3. 認知症の人とともに築く
総活躍のまちをつくる。

認知症は誰もがなりうるものであり、

住みなれた地域の中で尊厳が守られ、自分らしく
暮らし続けることが出来る共生社会をつくろう。

登壇者

【進行役】	新田 國夫氏	(一社) 全国在宅療養支援医協会会長、(一社) 日本在宅ケアアライアンス理事長
	杉山 孝博氏	川崎幸クリニック院長、(公社) 認知症の人と家族の会副代表理事・神奈川県支部代表
	鱒沢 陽香氏	矢巾町地域包括支援センター、認知症地域支援推進員
	長田 米作氏	とうきょう認知症希望大使
	野辺 薫氏	練馬区高齢者支援課
	谷口 泰之氏	御坊市介護福祉課、認知症地域支援推進員
	菱谷 文彦氏	前厚生労働省老健局認知症総合戦略企画官、内閣官房新しい資本主義実現本部事務局内閣参事官

議事要旨 新田 國夫氏

認知症の人に対する見方が変化しています。

認知症本人には自分なりの希望があり、多様な人生、力があります。本人だからこそ発信できる力があると考えることが、本人の意思、生き方、生活を重視することで、心のバリアフリーをなくすことです。何事も本人と決める、一緒に進める。本人の持つ力を重視し、可能性を生かすこと。社会で活躍し、役立てる存在なのです。本人が地域の中で共に暮らすことは認知症の人に対する見方を変える根本的発想です。

こうした見方の変化は和歌山県御坊市における、認知症者にやさしいまちづくりから総活躍のまちづくりへと、認知症施策を推進した取り組みに見られました。認知症条例を施行する動きの中で、認知症の人も含めた条例策定ワーキングチームを結成しました。バリアフリーとは何でしょうか。認知症の人の生きづらさやバリアは周囲がつくっているのです。「やさしい」という言葉は、支えられる、守ってもらおうというイメージを持ちます。自分たちも参加しやすい名前です。

岩手県矢巾町では、認知症本人が支援する側として参加し、対象となる人や支援方法を画一化しません。多様

性に柔軟に対応しながらエンパワメントを高める支援の実践を目指しています。

大都市東京都練馬区においても考えは同じでした。チームオレンジは高齢者保健福祉計画、介護保険事業計画に位置付けられており、認知症本人が地域の中で希望をもって自分らしく暮らし続けられるよう本人や家族の声を聴くミーティングを開催。生活支援コーディネーターと連携して、認知症サポーター等とともに地域で活動するチームオレンジ活動を実施しています。認知症希望大使の長田さんの志を尊重し、区内のすべての地域包括支援センターにおいてチームオレンジ活動ができるよう取り組まれています。

この分科会では、認知症の人が地域の人々とともに生きる地域をどうつくるのかという視点で活動が報告されました。最後に認知症バリアフリー社会の実現のために諸問題をさらに整理しました。

認知症になっても希望と尊厳を維持し、自分らしい生活ができること、認知症の人が本人の意思により、できることを安心かつ安全に行え、いつまでも新たなことに挑戦できる社会が実現するよう推進していきたいです。

■ 寄せられた声から

- 認知症本人の方が参加することや、条例を基に熱意をもって取り組んでいる方々がいることもわかり、今後の活動の励みになりました。
- 認知症の方の想いを発信できる場所の必要性や環境を整えること、偏見をなくすこと…本当にその通りだと思います。色々なことに気づくことができ感謝いたします。
- だれかひとりの意見を現実にしていくことで、最終的に生きやすい地域になること、支援者側が認知症の方の強みを否定し諦めてしまっていたことを再確認しました。出来ていることや可能性にも注目し、役割をもって地域で生活していけるように、出来ることからはじめようと思いました。
- 長田さんの「ふつうの人になりました」。そんな声が広がる地域づくりを進めていきたいと思いました。

アンケートの結果 参加者概数：291名 回答者数：114名

